同じになってきてしまった。
これからはきっとそれではだめで、やはり必修ではない、あるいは選択になる。あるいは選択でもない。選択でもなくても、やっぱり学生には、もし体育教員をしているのであれば、そこで何か主張していくような運動をしなければいけない。そんな状況でそんなことできるか、できるわけがないというようなお叱りを受けるかと思いますが、大学の体育のこれからを、将来を見据えた上で、何か学生に身体についてのケアを保障していく。そのためには、大学の中でなくては、やはり社会や地域、あるいはもっと外に向けてアピールしていくようなことが必要だろうと思います。

どうもわれわれの活動が、内々に向かってしまうというようなところがありますので、できるだけ大学でもっと地域、あるいは社会に発信するような取り組みをして、こういうシンボジウムとか、あるいは研修会でいろんな情報を提供していくことによって、切磋琢磨していけばと考えております。

結論じみたことはございませんが、こういうところだいたいどんな情報が交換、あるいは意見の交換ができればというふうに考えております。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

小林 ありがとうございました。
先ほど西平先生からは研究者のサプライサイドの立場からお話しいただきましたが、杉山先生からはデマンドサイドのお話をいただきました。大学体育の教員として望まれる資質能力や大学体育事情、それから最近のスポーツ関係の専門学部・学科の新設の状況についてもお示しいただいて、これからの大学体育のあり方についてお話しいただきました。

tだいまの杉山先生のご発表の内容に関して何か質問ございますでしょうか。

無いようでしたら、荒井先生にお話しいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

荒井 弘和

荒井 よろしくお願いします。大阪工業大学と大阪大学で仕事をしております、荒井弘和と申します。
本日はこんな遅い時間までお残りいただいて、非常に感謝しております。連合、また学会、ならびに、こういった場を与えてくださった皆様に心より感謝を申し上げます。

私は「若手研究者の立場から」ということで今日発表させていただくわけですが、いや烏売講師で、これは非常勤講師と同じだと思っていただいていいと思います。授業だけをやって、教育の対価としてお金をもらっているというのと、あと大阪大学で仕事をしているのは、ある先生の科学研究費の一部で雇われて仕事をしています。

それはがんの患者さんの研究をしているんですけれども、そういった研究をしているという、この二つの仕事を普段しています。自分で若手と言うのは少し恥ずかしいものがあるんですけれども、今日はこういった内容でお話をさせていただきたいと思います。

まず最初に、先ほどの先生方も示していらっしゃいましたけれども、ドクターを取った人がどういった進路に進んでいるのかというデータです。重複するので手短に言いますけども、就職をする人もいれば、ポストドクを含めて研究者とか、なかなか十分じゃない立場にいる人も多い。また、毎年700人近くは死亡、または行方不明の方がい
るという状況です。特に大阪大学で僕は仕事をしていたり、自殺を実際にされたり、またもうつながれたり、精神的な疾患を患ったという話を聞くことがあるんですけれども、今日はこういった実例があるということを、1万人いる中での700人ぐらいがそうなのかということを、もしご存じない方がいたらご理解いただければありがたいな、と小林先生がおっしゃったように、大学体育の領域はより厳しいという指摘もあるということです。

大学の業界において、一般の世の中で言われていると思いますけれども、雇用のミスマッチというのがあるのかなということを、こういったデータを見るたびに感じます。大学当局と指導教官、大学院生という三者に、大きく我々を取り巻く人々を分けたときに、研究業績とか博士号に対するラベリングみたいなものが違うんじゃないかなということを感じます。

大学生とか大学院生というのは、恐らくほとんどの人が自分に関心のある研究をしたいと。その研究をするのがラボとか指導教官の研究業績につながらないかということで研究をやっていくと思うんですけれども、大学院卒業したときには、先ほど杉山先生のデータにありましたように、大学では教育をしなさい、あなたは教育ができませんかということを面接で聞かれるわけです。このラベリングが違うということを、特にこれからの若い人は知っておかないといけないんじゃないかなというふうに、自分自身に対してもそう言

い聞かせています。

大学院生は何を目的として普段活動しているかというと、恐らく研究機関に就職することだと思います。もちろん大学を含めてですけれども、自分の関心のあるテーマについて研究をして、教育よりもはいけない研究について重きを置きたい。教育に関心があれば恐らく、かなり大ざっぱな言い方ですけれども、中高の教員のほうを目指すのかなあというふうに感じています。自分の研究をしたいと、大学院生は思う。

その一方で、その院生を指導する指導教官としては、研究室の運営、維持、発展、そして研究費を確保し続けなければいけないということが目的なのかと感じます。研究業績をラボとして出すこととか、または博士号取得者が出るということは、先生自体の評価指標の一つにもなると思います。または大学院生が研究業績を積むことによって、その研究室が研究室として研究費を得ることができるということもつながり思います。

指導教官の先生方は言うまでもないことですけれども、非常に忙しくて、多種多様な仕事をされている状況においてなかなか自分の研究に携わる時間がないので、その分院生たちに、君たち頑張ってよということで研究しないという指導をします。

大学当局の方としては、経営をし続けること、良質な学生を確保し続けることが一番の目的なのかと思います。大学の方としても恐らく、学部学科を設定したり改組したりするときに研究業績があるとか博士号取得者がいるということはポジティブなことだと思います。体育の授業、ここでは教養の体育に繋りますけれども、教養の授業として体育が今あるわけですが、それをやるよりは、すく役に立つこととか、わかりやすいキャリア教育とか、またはソーシャルスキルトレーニングみたいなことに注目して、それらを導入したいということが大学当局の意見なのかというふうに、見ていて思います。教育をしなさいということで
大学の体育教員はデータを示す必要があると思われます。小林先生が先日「体育の科学」に「大学体育の戦略的マネジメント」という文章を書かれていて、非常にすばらしいなと思って、私もとても啓発されました。ぜひご覧になっていただきたいんですが、これを読んで思ったのは、私たち若手は、自分たちがこれをやりたい、これが将来的に希望だということを主張するだけではなくて、自分が大学の戦略、これから大学がどうしていきたいのかという戦略に、どうハマればいいのかということを考えることも必要なのかと感じます。

具体的に言うと、大学当局に必要性を感じてもらうようなデータを示したりとか、自分の上司、私たちの年代ではなくか大学に働きかけるのは困難ですが、自分の上にいる人に働きかけを頼ってもらえるような、上司にとってインセンティブがあることをやろうということを若手は考えることが大事かと思います。

大学経営、大学当局に対して大学体育の意義をアピールするために、例えばどういうデータの示し方があるかと思います。私はいま大阪工業大学にいて、体育の教養の授業をやって、その効果を示そうとしているんですがけれども、そのグループの中心でやられている木内（敬事）先生、今日もそこにいらっしゃいますけれども、この木内先生が体育の宿題というのを授業に入れていらっしゃる。日常生活でも身体を動かしたりとか、そういう宿題を出すことが体育の授業では重要じゃないかということをやっていらっしゃるわけです。

この授業をやったときに、日常の身体活動量が上がるというデータが出てます。これは『体育学研究』に既に掲載されています。ふだん階段を上ったり、ちょっとコンビニに行くときに自転車を使わないで歩くというふうになるということが、データで出てます。そういった日常の活動をするとき、今度はメンタルヘルスとか睡眠の質、こういったことも改善される。この身体活動とこういった両者に関係があるんだということを、また別の論文（『心身医学』）で既に明らかにされています。今、杉山先生がおっしゃったように、うっとうしいという話があまり珍しくなくなってきた現在ですけれども、日常生活で体を動かすことが大事だと、部活だけやっていればいいんじゃないよということ（『大学体育』）を示すことが、こういったデータでできると思います。こういった日常の活動は今まで高校のとき部活をやっていましたとか、そういったことと関係がありませんかどうかが明らかになっています。

大学の教養体育の必要性を示するために二つ大事なことがあると思います。これは『体育科教育』に書いています。一つは体力向上の必要性を説明すること。現代社会はあまり体力が要らない世の中であるにもかかわらず、体力が増えればいいというだけではありませんが、得られないということで、そのことをより妥当な理由を見つけて説明することと、もう一つは、体力向上以外の効果が体育にあるんだということを示す、これも大事だと思います。こういったことをアピールして、役に立つことがアピールできなかったら、僕ら教養授業の体育はコマを奪われるのが現状だと思います。
大学の教養体育の必要性を示すために（荒井, 2006）

1. 体力向上の必要性を妥当な理由によって説明する
2. 敎養体育の体力向上以外の効果を明らかにする

教養体育が「役に立つ」ことをアピールできなければ、他の教養授業にコマを奪われる

どういった効果があるかということと、これも先ほどの「体育科教育」に書いてありますけれども、大学在学中には体育の授業を受けて心身が健康になるということと、生活習慣が維持、改善されるということ、また友達になりながら大学の体育の授業で期待できる。「1年生になったら」という歌、これをよく若い人に例として説明するんですけれども、この1年生というのは小学生だけでないよう、大学でも社会人でも一緒で、1年生になったらみんなで食べたり、運動したり、笑ったりということを望んだということを説明するときに使っています。こういったことをデータとして示すのが、我々の役目かなと思います。

教養体育が持つ体力向上以外の効果（荒井, 2006）

在学中における意義
1) 心身の健康の維持・向上
2) 生活習慣の維持・改善
3) 友達づくり

卒業

卒業後における意義
1) 生活習慣の維持・改善

卒業後においても、大学を卒業したら就職をすると思いますが、生活習慣が悪いことはとても大事だ。先日も『東洋経済』という雑誌で、「できる社員ほどメタボリックくん」というのが表紙に出ていました。働き出したらすぐに生活習慣が乱れて、体が衰えるという、どんどん大学時代と異なってくるという状況が世の中にあるわけではないから、そういう意味でも体育は大事だということを示すといいなと思います。

こういった体育のことを示すことは大事だと思うんですが、残念ながら現状はなかなか厳しい。若い人は、だれかが何かをしてくれるんじゃないのかとか、就職口を探して斡旋してくれるんじゃないかと、あまりそういうことは考えないほうがいいのかなというふうに、私は思っています。あまりそういう状況を知る機会がないと思うので、今日何とか若者がいられようと思っていますから、どういった機会が大学の状況を熟知してもらうきっかけになったらいいなと思います。

あまりこういう機会はないんですけれども、私が勤めている大阪大学で、平成18年度からカリキュラム多様化促進事業というのが文科省でスタートしていて、その一つとして科学技術キャリア創成支援室というのができており、ポスドクの人とか、ドクターを取っていなくても修士を出た人とか、学部卒ですが、この業界で安定した分身で仕事をできていない人のキャリアを支援しようというものができていますので、もし関心のある方がいましたら、私が紹介しますので、ぜひおっしゃってください。これは大阪大学以外の人も対象になる事業で、文科省の事業ですので、ぜひ皆さんに知らせていただきたいと思います。

つづいて、じゃない人は結局何をすべきなのかということを皆さんに申し上げたいんですが、まずやりたいテーマでなくても、自分の気持ちと折り合いをつけて論文を書こうということです。あまりやりたくなくても、とにかく形にするということが業績になるわけではないので、そういうことが大事だということです。

あと、就職の面接なんかで思うのは、世の中に
役に立つことをやっていますということを訴えられると嬉しいと思います。役に立つようなわかりやすいテーマ、今だったら生活習慣病予防とか介護予防とか、そういうトピカルなもので論文を書くことが大事かなと思います。

それからほかの領域に出ていて雇ってもらうことを考えるとというのも大事だと思います。もう体育がこれ以上伸びづらいことはわかっているわけですから、福祉とかハピネス、それから老年学、医学、心理学等に出ていて雇ってもらうことを考えるというのも必要かなと思います。

次は先生方に対するスライドで、若手の取り扱いに関するお願いですけれども「若手を大事にする」という言葉の意味は、これは恐らく「若手じゃない人を大事にしない」という意味なんだと思っています。バイは決まっているわけですから、だれに犠牲になっても変わらなかったら、もう若人は吸い上げてもらえないわけです。これは失礼な言い方だと思うんですが、もうそういう状況なのかと思います。

それから非正式講師です。教育歴がないと体育の世界では仕事がしづらいということは皆さん十分わかっていらっしゃると思いますが、非常勤講師を探すときに、年配の方々に経験を生かしてやっていただくのも大事だと思うんですけれども、若い人を育てるという意味でも若い人に声をかけてあげてほしいなと思います。

それから、無償で研究補助を雇うのではなくて、科研費でちゃんと雇ってあげてほしいなと。僕も実際にいま科研費で雇われていますし、科研費で雇われたことによって大阪大学から私自身も科研費の申請ができ、科研費をもらっています。こういうこともあるので、という話をすると「そんなややこしいことをする暇がない」と言う先生もいらっしゃるんですが、そんなことすらできない先生だったら、いい仕事なんかなできるはずがないと私は思っています。

体育人提案ということで残り2枚のスライドなんですが、体育領域を活性化させないと養成と確保は難しいと思います。それぞれの立場で体育のテーマを流用させて、周知させたいと思います。

私たちは体育、体育ということで今日ずっとお話が出て、体育のことだけを考えていてはいいのだろうかということを思うんです。これは、今日もそこにいらっしゃる、上司の中村（友浩）先生がよくおっしゃるんですが、体育のオリジナルティは現場であると。役に立つこと、現場ということが、体育関連領域の最大のキーワード、共通項だと思います。これらをキーワードにして、科学領域、研究と世の中のもの全体に新しいモデルを示す、そういう気概で、体育は先を取って、頑張っていく必要があるのではないか。

そのためにもデータを論文化する。論文というのはどの領域にも共通の数値ですから、そういった評価を受けるためにも論文化をしていて、体育が発展するようになったいなと。

非常に偉そうな言い方ばかりして恐縮なのですが、以上でも発表を終わらせていきたいと思います。ありがとうございます。（拍手）

小林 どうもありがとうございました。

荒井先生には若手研究者の立場からということでお話しいただきました。荒井先生は大学体育に関する研究も進められておいて、大学体育奨励賞、それから教育賞もおとりになっていますので、若手と言っては申しわけないぐらいですが、一番若手に近い方ということで、若手研究者の気持ちなどもお伝えいただきました。

若手に対しては、何をすべきかということ。それから大学の指導教官に対して、あるいは大学体育の教員に対してはお願いという形でいろいろな提案をいただきました。荒井先生のお話に関してご質問ございますでしょうか。

三宅 北海道の北星学園大学の三宅と申します。
先生のお話をも出来ましたが、小林先生の説明に出てきましたけれども、大学院の定員はどんどん増えているんですね。そして大学体育の教員の定員はどんどん減る。そのところをこれからどのようにしていくのでしょうか。院生の就職活動を応援・支援もしなければいけないと思いますが、就職先はどんどん減っていますので、就職活動を増加するのは当然の事だと思われます。

何年か前に大学体育が必修から選択で各大学で自由にしなさいとなってから、結局大学体育の先生が減っていくだろうというのは予想できたんですね。しかし大学院生の数が予想できなかったと思うのですが、その矛盾点、特に大学院の院生をたくさん指導されて大学は今後どのような対策を考えられているのでしょうか。院生の定員を減少させる事を考えていらっしゃるのでしょうか。先生はどのようにお考えでしょうか。

荒井 それについては、後ほど議論でればと思っています。もう時間がありませんので…すみません。ありがとうございます。

小林 それは、ディスカッションに入りたいと思います。

ただいまの三宅先生のご質問ですが、大学院の定員がふえている。そして供給がふえているのに、対して、一番大きい就職先である大学体育が縮小しているということで需給のバランスが大きく崩れているのではないかと、これに関してどういうふうにお考えなのかということですけれども、西平先生、お答えいただけますか。

西平 私が思うのは、それぞれの大学が今生き抜くためにいろんなそれぞれの大学の個性を考慮し、大学院を作っていると思います。特に、博士課程をつくって博士号を出すというのは体育科学の研究を養成し、国内、国外で競争できる人材を輩出する目的であると思います。そのような人たちの中で再び大学なり研究機関に勤めることができると思います。それは大学の人がと思います。大学院を出たからといって、必ずしも全員教育機関、あるいは大学に勤められるという考えは、私はもうやめたほうがいいと思うのです。小学校の校長、行政の管理者など、管理職なども将来学位取得が必要であると思います。

大学院を出たからといって研究機関に必ず勤めるというような発想をずっと持っていると、大学での需要がなくなり、需要と供給のバランスが崩れているという話をよく聞くと思うのですね。ましてや修士課程はやはり小学校、中学校、高等学校、あるいはスポーツの養成機関、あるいは会社でも市役所でもどこでもいいのですけれども、やっていく。将来、小学校・中学校の教員も学位を持ったほうが良いという時代が来るかも知れないと思いますので、大学院を出して博士号をもらった者の大半が大学に勤めるという考えは、私にはありません。

そういうような発想を持っていかないと、大学院博士課程が増え、博士号取得者が増えて大学の教員はそんなにふえてないのにどうしようという話が出る。

小林 ありがとうございます。

そうしますと、いわゆる研究者ではない道の就職先の開拓をどのようにされているのか、あるいは荒井先生がおっしゃったように、やはり若手の大学院生は研究をきちんとやりたいという意識が強いと思いますので、大学院生の意識の改革などしないといけないと思います。筑波大学ではどのようにお取り組みをされているんですか。

西平 私の大学でもそうですね、他の大学でもそうでしょうけれど特にこの博士課程の役割を限定
体小林ありがございました。

体育に関する博士課程が大切にさせていただきましたけれども、そのような教育に携わっている先生方で今のことについてコメントをいただけませんでしょうか。

山田東京大学の山田です。ちょっとお伺いしたいんです、司会者のほうから、いわゆる国の方向性としての科学技術の発展・向上ということで提示があって、それに対する研究者が体育の科学をどう推進するかというようなことで西平先生がお話しいただいたと思います。しながらも、大学院の体育科学のあり方というのは各大学によって異なります。例えば体育専門の大学院、教員養成系の大学院や生命科学を基盤とした大学院でのカリキュラム内容がかなり異なっています。その場合、体育の科学をどのようにしてとらえて、それらをどのように継承するのか、極めて難しい問題だと思うんですが、その辺はどのようにお考えでしょうか。

西平私は基本的に同じだと思います。どの程度のものなのか、どの程度の水準でやられるかという話だと思います。

ですから教員養成の場合は、やりたいのだけれども、またこれもやらなければならない。先ほど大学体育を見ていて、例えば大学院に学問も要求するし、教育能力も要求するとかいったら、3年間しかありません。3年間でこの人は学問を取なければいけない。大抵の研究科では、30歳前後に自分のできる領域でがむしゃらにならなければ学位は取れません。それもこれもとやれる時間はありません。

在学中に、私のところへ非常勤講師依頼が来たら、なるべく教育の力をつけるように正常勤講師は行くようにしていますが、それをたくさんやったなら3年間ではとても学問は取れないと思っています。4年も5年もかかってしまう。

そのことの兼ね合いということと、もう一つは教員養成で一番メインは何か、あるいはそうでない研究者養成をまさにねらっている場合は何かメインか、生命科学で自然科学系の領域では何かメインか。それはやっぱり大学で濃淡をつなければいけないと思いますが、基本的には同じだと私は思います。

山田個々の専門領域で、生理学あるいは生化学に関するいわゆる技術的な開発というのは、特に体育の領域でなくて、他の分野でもそういう技術はかなり開発されている。それらのほうから学ぶことが非常に多い。その中で、体育科学というのはどういう形で位置づけられているのか。また、大学院ではどのようにシステムテクニックに体育科学を教えていくべきなのか。その辺のところが一貫していないように思います。

西平先生が答えたらほうがいいかもしれませんね、
スポーツ哲学とかの学問領域をそれぞれ検討してほしいですが、体育科学、スポーツ科学、健康科学というのは何かということを含め、ただ動きを研究する学問なのか、あるいはスポーツの文化的なものを研究する分野なのか、健康科学をやるのか、スポーツ科学とか体育科学とは何なのかというのを一つは講論されていますけれども、それとどこかで整理しなければならないと思います。

自然科学はやっぱり身体の動きのメカニズムの研究を運動生理学的あるいはバイオメカニクス的な研究や、それを行うために、我々独自の手法というのは今のところ生み出すのがなかなか難しいのではないかでしょうか。他の領域とは違って、体育科学は他の学問分野ができない動きの法則性を、静止して寝ているのではなく、動いているときの現象の法則を私の場合は見つけようとしているということです。体育科学、あるいはスポーツ科学というのが、あるいは健康スポーツ科学というものが、その体育学の全体像を明るかにしないといけないと思います。

小林　よろしいでしょうか。ここにございませんでしょうか。

佐々木　北星学園大学の佐々木です。実際大学院の卒業生なので、現在の話の内容は事実だと思いましますが、もう一つ体育学会も大学体験談というか、大学での体育実技の実態をオープンな形で知らせなければいけない。それではわかりますか？小学校・中学校の体育の先生方や、地域のスポーツ振興あるいは地域指導者、そういう人たちを含めて、そこで指導的な立場で大学院を卒業した方が就職することで流れていくシステムが出来ればいいと思うんです。

しかし、大学院に行って、例えば筑波大学大学院に行かれて、ある研究室に入られたその段階から体育を忘れいて研究しているのが圧倒的に多いのではないかと思います。

学位を取得した後の時期ですよ。体育を思い出すのは、また大学に就職してからではないかと思います。ところが大学では、受け取る側の我々としては、実技もちろん出来て欲しいし、学生との対話も上手におやって欲しい。ところで研究が出来る環境ではないし、出来ないからストレートに体育の現実があるわけです。そのジレンマというものを絶えず調整していくなければならない。

ところが最先端の研究が出来ていた環境から、全く殆ど出来ないような環境のところに就職する訳です。ですからそのギャップをどう見るかという問題が、絶えず我々の課題としてあるわけです。専門課程のあるところに就職された方々は、そういうギャップを多少感じても、そんなに大きく感じない。

私は最初、女子短大に勤めて、初年度の研究費は6万円でした。そして15年位経っても20万円でありました。はっきり言うと、研究なんかできる訳がないんです。その中で地道にいろんな事を重ねていくという作業があるんですが、若い方はそういう事が我慢出来るかというと、なかなか難しいと思います。ところが、嘱託で身方が不安定だったり非常に勤ももちろんいますけれども、やはり契約で不安定な状態であったりします。

そういう問題を抱えた人たちがどんどん重ねていている。大学院生の就職場として、教授や校長先生になっていく道もあるといっても、教育大学のマスターコースを出られた方がもう既にいるわけです。だから、本当のものはもちろんないと思いまます。あるいは我々は、日本なら日本の国民の健康体力を考える場として体育学会をもう一度位置づけなければいけないだろうし、そのために、大学という枠を少し外していかなければならないと思います。

私が最初に学びに参加した時は、高校の先生とか一生懸命参加してくれるのはですが、中には大学以外の教員は会員に参加すべきではないという人がいたわけです。もう大分昔にいなくなりました。
たけれども。それから、非常にクローズされた空間に我々が存在しているということはありのままよくないことで、もう少しオープンである必要がある。

実際オープンになったので、金銭的にもあまり恵まれていない人が多いのではないかと思います。

その辺のところに我々は目を向け、あるいは協力して、方向性をとっていくという事が大切ではないか。難しいとは思います。そうしないと体育がほどの人たちはうまく融合出来ない。ある

いは共通言語で何か話も出来ないです。ですから、我々はそれを自覚しないとだめなので思って

ます。その辺もう少し広がりを持たせる

と、それをぜひ考えたたいと思うんですが、
どうでしょうか。

小林 ありがとうございました。

私が紹介しましたように、科学技術基本計画で

は人材育成に対する予算が多額になっていますけ

れども、黙っていてもらえるものではありません。

これは競争的な配分なので、他の領域と争って、

体育でどれだけ取れるかということが重要だと思う

ます。そのためには指導教官の先生方のご指導を

十分にいただきなければいけないと思います。

もうそろそろ時間になりますので、私が今回こ

の3人のご説明をお聞きしていきましたことを

申し上げます。専門学部では本当に世界と競争で

きような研究を進めて、またそういうような人

材養成も進めてほしいと思います。特にそういう

中で筑波大学が「21世紀 COE プログラム」を取

られたのは我々としても大変うれしいことでした。

「魅力ある大学院教育イノシアティブ」のほうも

ありますので、ぜひそういうようなものも含め、

ほかの大学でもとおいただきたいなと思います。

それから教養体育のほうとしては、やはり教養

体育の研究、あるいは社会との連携とか産学連携

を進めて、本当に役立つ研究を行いているって、

荒井先生がおっしゃったように、大学当局に存在

価値を認めてもう。そして、そういうことをし

ながら若手の育成もしていくことが大切です。

若手に関しては、例えば欧米の研究者ですねと博
士号を幾つかの領域で取ったり、ドクターを持っ

ているのに実業界や政治のほうで活躍されたりし

て、専門と全然関係ないようなところで活躍され

ているような方もたくさんいらっしゃいます。や

はりドクターというのは研究能力をつける。それ

は就職した後では、荒井先生がおっしゃったよう

に、現場からテーマを見て、そんなのではでも

研究を進めていただけたい。そのためにも、そ

のような若手の養成を学会とか大体連

が一緒に手を携えてしていただければと思います。

それでは、最後になりますが、一言ずつお話し

いただきたいと思います。

杉山 さっさと意見をいただきまして、全くその

とおりだと思います。これは実際にあったことで

すが、ある民間のフィットネスクラブが、大学の

体育実技の授業をアウトソーシングしませんかと

いうようなことを直接言ってくる。これはどのよ

い話で、反対に我々の側から、実技指導のノ

ウハウや教材などを提供するようなことができる

はずだと私は思っています。今まではそういうよ

うなことはタプーだった。しかしこからはそう

いうようなことも考えていかなければならない。

そしてまた、大学によっては研究重視の大学も

ある。先ほど西平先生がおっしゃったような、い

わゆる大学院大学といった研究の拠点校であれば

そういうようなこともある。各大学が置かれてい
る場、あるいは各大学がどんな学生を育成するかにも関わって、大学体育のあり方というのをそれぞれ模索しなければいけないだろうと思います。
それは、国立大学であろうと私立大学であろうと短期大学であろうと同じだと思います。

ですから先ほどのように、その大学に専任として勤めたら、もうしようがないというのではなく、これからの教員の流動化も高まることが予想されていますし、自らの希望する職種を求めて、業績を積んでそういうところに動いていく。そうしたことが保障されていくことが大事だと思います。

しかし今のところ、そういったところまではまだ考えられないと思います。これから先の話だと思う。現在生きるためにどうしたらいいかというものをまず一番考えなければいけない。実際もう数年で体育教員が誰もいなくなってしまうというのではやっぱり困る。そのあたりでどう運営していくかということをもっともっと危機意識を持ってやっていただきたい。いや、していかなければならない。

これに対して連合は何ができるか。そこは私もよくわかりません。ですから、こういう情報交換の機会をできるだけたくさんつなぐということが一番意味を持っているわけです。

小林 ありがとうございました。それでは、荒井先生、お願いします。

荒井 本日はありがとうございました。特に若方に何か私でご協力できることがあれば、必ず最大限の応援をさせていただきますし、もし今日のスライドみたいなものを後輩の方にお見せになるということであれば必ずお送りしますので、後ほどおっしゃっていただければと思います。ありがとうございました。

小林 ありがとうございました。

最後となりましたが、学会を代表して、現在理事であられる、次期の常任理事になられる阿江先生からコメントをいただければと思います。よろしくお願いいたします。

【日本体育学会から】

阿江 筑波大学の阿江です。

昨日、会長と常務理事、学会担当の後藤先生は欠席ということでしたので、その代わりに何か言うようにと指示を受けていましたが、見たところ、高松先生、後藤先生は出席されているようです。

（笑）せっかくのご指名ですので、数秒お話をさせていただきたいと思います。

今日は大学体育連合と共催のシンポジウムを開催しましたが、ここまで来ることは非常に延々曲折がありました。共催するとか、だめかどうか、いろいろあったんですが、体育学会の小林会長、後藤先生、私と大体連の杉山先生、小林先生と数度お話をしにして、これからはいい意味で体育学会と協力し連携していこうということになりました。そして今日が最初です。

ただ、決まった時期がちょっと遅かったので、なかなか皆様が集まっていただけないような時間になってしまいましたが、次回は兵庫支部の主管で神戸大学で体育学会が開催がありますので、そのときには多くの方が集まりやすい時間帯で行なっていただけるというなお話も聞いておりますので、次回からはもっと活発なシンポができるかなと思います。

今日は会員の方々から非常にいいお話をいただいたので、ぜひこの辺のテーマでまた大会をやっていただきたいと思います。体育学会に協力するというより、皆様も構成員ですから、ぜひ一緒になってやりたいと思います。今日はいろいろありがとうございました。（拍手）

小林 どうもありがとうございました。

本日は遅くまでお集まりいただきまして、皆さん、どうもありがとうございました。また、シンポジストの先生方、どうもありがとうございました。これで閉会といたします。（拍手）